

SHOW HEY シネマルーム

★★★★

クジラの島の少女

配給/日本ヘラルド映画

2003 (平成15) 年10月5日鑑賞

Data

監督・脚本：ニキ・カーロ

出演：ケイシャ・キャッスル＝ヒュ
ーズ／ラウイリ・パラテー
ン／ヴィッキー・ホートン／ク
リフ・カーティス

👁️👁️ みどころ

ニュージーランドのマオリ族に伝わる勇者伝説……。それは今から一千年前、クジラに乗ってハワイキからきた勇者パイケアの物語だ。マオリ族の族長は男子によって承継されてきたが、パイケアと名付けられた主人公は女の子。その誕生を喜ばれなかった「クジラの島の少女」は、不思議な能力を見せ、強いリーダーシップを発揮していく。多くの映画祭で「観客賞」を独占したことが十分うなずける感動作。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

<一体、何の物語・・・？>

この映画を観ようと思ったきっかけは、新聞やポスターの宣伝になっている1人の少女の写真。『クジラの島の少女』というタイトルも変わったものだし、写真だけみるとこの少女は日本人のようにも見える。一体何の映画かよくわからないまま、何となく……。しかし新聞の宣伝をよく読んでみると、<観客賞>独占!! (トロント国際映画祭/サンダンス映画祭/ロッテルダム映画祭/サンフランシスコ映画祭/シアトル国際映画祭/マウイ国際映画祭/レイク・プラシッド映画祭) とある。そう、この映画は、ニュージーランドのマオリ族の神話を元にした、心暖まる奇跡の物語なのだ!

<原題はWhale Rider>

この映画の原題は『Whale Rider』。つまり「クジラに乗る者」ということ。舞台はニュージーランドの東海岸にあるマオリ族の小さな村。この村には、今をさかのぼること1千年前、遠くハワイキから新しい地を求めて、勇者パイケアがクジラに乗ってた

どり着いたという伝説が語り継がれてきた。

現在の族長はコロ。コロの長男ポロランギは男女の双子の子供を授かるが、その出産時に妻と男児は死亡。女兒だけが生き残った。男の血統を絶やすことを恐れ、さらに「男児をつくれ！」と励ますコロにポロランギは失望し、村を出ていく決心を固めた。

それから12年。コロの反対を押し切ってあえて伝説の勇者と同じパイケアと名付けられた少女は、祖父コロと祖母フラワーズの下、意思の強い、賢い女の子として育っていた。

<女はダメ・・・？>

主人公の少女パイケアに扮するのはニュージーランド生まれのマオリ人で、1万人の子供の中から抜擢された女の子。「意思力の強さ」がその目の「強さ」にあらわれている。

ある日、コロと対立して島を出て外国生活を続けていたポロランギが島に帰ってきた。これを歓迎するコロ。ポロランギにはドイツに妊娠している新しい恋人がいたが、なぜかポロランギはこれを率直に伝えなかった。ある日偶然それが発覚し、ポロランギをなじるコロ。そのため後継者をめぐる2人の溝は決定的になり、ポロランギは再度島を出ていくことになった。そしてパイケアもポロランギと共に……。これを見送るおじいちゃんとおばあちゃんたち。しかし……。

いったん島を出ようとしたパイケアの耳には、なぜかクジラたちの声が……。クジラに乗ってこの地にやってきた勇者の血を、パイケアは女の子でありながら受け継いでいたのだった。しかしパイケアは自分自身ではそんなことを知る由はなかった。そして祖父のコロにとっては族長が男であることは絶対であり、そしてあまりにも当然のことであった。

<感動的なクジラとの対話>

パイケアと同じ12歳の男の子たちを集め、これを教育し、鍛えていく中で後継者を見定めようとするコロ。しかし、決定的な後継者は現れず、失意に沈むコロ。コロは先祖の助けを必死に求めるが、それもムダだった。

一方パイケアは、男の子たちの手で見つけることができなかった族長のシンボルであるクジラの歯の首飾りを海に潜って見つけてきたり、スピーチコンテストで優勝したりと徐々にそのリーダーシップを発揮しはじめた。「ひょっとして、このパイケアは……？」と感じ始める祖母のフラワーズたち……。

そんなある日、ニュージーランドの海岸に多くのクジラが打ちあげられてきた（座礁してきた）。クジラの「集団座礁」の原因は、磁場の変化によるものとも三半規管への寄生虫の発生によるものとも言われているが、いったん座礁した何トンもの重さのあるクジラは人間の手で動かすことはできず、結局クジラは死んでしまうことになる。コロをはじめマオリ族の村人たちは必死にこれを海に戻そうとしたがムリ。クジラたちは死ぬのを待つしかない状況になってしまった。そこに1人静かにあらわれたのがパイケア。彼女は「対話

をするかのようにクジラと接し、その上に登ると、「さあ行こう」と声をかけ、足でその体を蹴った。すると何と座礁したクジラはその声を聞きわけたかのように海に向かって・・・。

ストーリーの展開上、予測できる流れではあるものの、やはりこの場面は感動的。思わず涙が・・・。多くの映画祭で「観客賞」を独占したことがわかる。そして「壮大なクライマックスに、世界中が泣いた！」という宣伝文句もやっとな理解することができた。

<監督・俳優はすべてマオリ人>

この映画の脚本を書き、監督でもあるニキ・カーロはニュージーランド生まれのマオリ人。そして主人公の少女パイケアをはじめ、出演する主な俳優も全てニュージーランド生まれのマオリ人。セリフは英語だが、先祖への祈りや歌の場面ではマオリ語(?)もたくさん出てくる。だから少しわかりにくい部分もあるが、それはこの映画の理解の妨げになるものではない。なぜならこの映画は人間の心を描くものだから。

女の子として生まれてきたのはパイケアの罪ではないにもかかわらず、祖父のコロから後継者として全く認められないパイケア。しかしコロの心を理解し、懸命に祖先に呼びかけるパイケアの心が祖先に届き、パイケアこそがマオリ族のリーダーシップをとるべき人間(女性)であることが明らかになるのだった。とにかく12歳の少女パイケアの強い目が印象的な感動作だ。

2003(平成15)年10月6日記